

第66集

令和4年度

研究紀要

(実践事例集)

研究主題

学ぶ意義を考え、学びに向かう力を育む授業改善

～生徒と共につくる新しい学び～

大分大学教育学部附属中学校

令和4年度 研究テーマ

学ぶ意義を考え、学びに向かう力を育む授業改善

～生徒と共につくる新しい学び～

I 研究の経緯・主題設定の理由

DX=
デジタルトランスフォーメーションの略

本校の学校教育目標=
自主・自律の精神の下、
高い学力・深い愛の心・堪え忍ぶ力
を兼ね備えた気品ある附中生の育成
を目指す

ICT 端末=
GIGA スクール構想によって導入され
た一人一台端末の呼称としている。
本校では、chromebook を採用
ICT 端末を含むすべての機材の総称
はICTとしている。

学ぶ意義=
今の学びが将来の自分のつながりを
考えることにより見出される 学習
に取り組んでいる意味や目的
学ぶことや能力開発のために積み重
ねた努力や経験によって得られる
肯定的な自己理解など

「附中×GIGA」=
本校における GIGA スクール構想
推進の計画。一人一台端末と大容量
ネットワーク網を活用した授業や活動
の推進や活用をサポートする支援体
制の構築をする取組
(R3年度～R5年度の3年間計画)

今日までの約3年間、新型コロナウイルスの流行は、私たちの日常に大きな影響を及ぼしてきた。また、DX に代表されるテクノロジーの進化が加速し私たちの日常も大きく変化している。

学校においては、生徒の活動に感染症対策でいくつもの制限をかけてきた。安心と安全を守るためとはいうものの、長く続いたことによって「待つ」生徒が増えたと感じ始めた。今後も続く「with コロナ」の状況下で、いかに生徒の自主・自律の精神を育みながらキャリア形成をしていくかという問題に直面している。また、ICT を活用した学習活動の充実を図りながら、学習の基盤となる資質・能力として位置づけられ、デジタル社会を生き抜くために必要とされる「情報活用能力」をどのように育むかという課題に対応することも私たち教職員に求められている。

本校では、昨年より研究テーマを『学ぶ意義を考え、学びに向かう力を育む授業改善』としている。自主的・自発的な学びの原動力と考える『学ぶ意義』を実感できる実践を蓄積することを目的とした研究である。『学ぶ意義』を見出すための取組を、「授業改善」「ICT 活用の実践」「共に」の3つの柱とした。

生徒が『学ぶ意義』を実感できているかどうかは、「経験を次の学びや行動に生かそうしている姿」でとらえることにした。生徒一人一人が『学ぶ意義』を見出すことができれば、「もっと調べてみたい」や「次はこれを考えたい」といった好奇心を生み、次の学びや行動につなげることができるからである。さらに、主体的に活動した経験を積み重ねると肯定的自己理解がすすみ、自らの判断で行動し、他者と共によりよく生きようとする「自主・自立の精神」の涵養につながるであろうと考えている。

1年目は、副主題を「ICT 機器の効果的な導入」とした。『附中×GIGA』によって ICT 端末が導入されたことを受け、ICT 端末を学習道具として「まず使ってみる」に重きをおいて実践した。どの学習内容で、どの場面に、どのように用いるかを考える実践とその交流を通して、新しい学び方を見出すことができたと自負するところである。一方では、ICT 端末の利用についてのトラブルも発生した。学習者も授業者も「ICT 端末の価値は、使用者によって決まる」という意識をもち、ICT 端末を正しく使うことを促す必要を実感した。

そこで、学習者の学ぶ意識を高め、ICT 端末の使い方やマナーについてのあたりまえの質を向上させる支援をすれば、より良い学習道具としての効果が期待できると考え、2年目の副主題を「生徒と共につくる新しい学び」とした。学習者(生徒)の意識を「授業を受ける」から「授業を創る」に変えるために、学ぶ意義を考えることと授業者と学習者の『共に』を大事にしなが、授業実践に取り組むことにした。

II 実践の3つの柱について

授業改善

今年度の研究主題に対して、実践する3つの柱を次のように設定した。

① 学ぶ意義を考え、見出させる授業力向上(『問い』による)

- ア、学習者が『問い』を生み出す工夫を単元計画に位置づける
- イ、「見通し」と「振り返り」につかえる学習記録について各教科で考察する
- ウ、教科を学ぶ意義(リーフレット)を作成する

ICT活用の実践

② 主体的・対話的で深い学びを豊かにするICTの効果的な活用

- ア、「学習道具」として、ICT 端末を活用した授業を「トライ&エラー」で実践する
- イ、教科を超えて活用できる「学び方」を共有し、整理する
- ウ-1、「端末の価値を決める責任ある考動」を意識させる取組を企画・実施する
- ウ-2、「正しく」と「より良く」をキーワードとした附中版「情報活用能力」を設定する

共に

③ 「生徒と共に創る授業」の推進

- ア、「附中×GIGA」を推進する「GIGA サポ」を支援する
- イ、学習委員会(生徒会)と連携して学業指導を推進する

III 実践内容① 学ぶ意義を考え、見出させる授業力向上

『問い』

学習者が『問い』を持って授業に臨むことができるように、授業者は単元計画に様々な工夫を位置づけることにしている。授業者は、発問、問題、課題、道具、活動などの場面で学習者がめあてを見据えたり、深い学びに迫ったりしながら頭を働かせるように促す仕掛けを行なうようにしている。学習者が学びに向かうときどのような『問い』を持つことができているかを様々な手立てを考えて授業に取り組むことができた。

学習記録

学びあいの筋道や成果の見える化を図る学習記録について教科部会で交流しながら実践を進めている。単元計画を立てるときに、見通しをたてながら思考を整理したり、促したりすることと、思考の過程を振り返ることで次の学びへつなげるには、学習記録をどのようなものにして、どのように使うか授業者にやってみよう依頼をしている。特に振り返りにICTを用いたとき、生徒の様子をどう見とればよいかなどの課題が見えてきた。

教科を学ぶ意義

今の学びが将来にどうつながっているかを学習者と授業者として共有するために、教科に対する授業者の想いを語り、共有する機会として設定した。「学ぶことが社会に出てどんな場面で役に立つか」「今学ぶことでどんな人になってほしいか」「教科の授業では、これを大事にする」というメッセージを生徒に届けるためにリーフレットにまとめる作業に取り組んだ。生徒との共有まではできていないので、次年度活用することになっている。

IV 実践内容② 主体的・対話的で深い学びを豊かにするICTの効果的な活用

ICT 端末を活用した授業

ICT 端末は、使うこと自体を目的とせず、附中の学びに「ワクワク感」を増やすための道具である。どのように使えばよいかを学習者(生徒)と指導者(教師)が一体となって模索している。目的達成に必要な「学習道具」として活用する良さ(効果)についてを、「～しやすさ」に着目して授業実践を行うことにした。

「～しやすさ」

放送大学中川一史教授の講演より引用

- | | | |
|-----------------|-----------------|----------------|
| ①書きやすい・消しやすい | ②動かしやすい・試しやすい | ③共有しやすい・連動しやすい |
| ④大きくしやすい・着目しやすい | ⑤繰り返しやすい・確認しやすい | ⑥残しやすい・比べやすい |
| ⑦説明しやすい | | |

「学び方」の共有

年 3 回の実践交流会の中では、自分の実践の良さに気づき、より良く改善するヒントを得ることができ、ICT 端末を効果的に活用することを共有できた。授業で活用する取組を通して、「スライド等を協働制作（同時編集）し、発表する。」「クラウドを利用して、学習者同士が意見を交流する。」「教材を操作しながら思考を深める。」といった教科を超えた新しい学び方が生まれ、ICT 端末が目的達成のための道具であることを実感できるまでになった。

「正しく」と「より良く」

導入当初より、「まず使う」「慣れる」を合言葉に実践を進めているが、懸念したとおり授業と関係ないサイトを閲覧したり、不適切な書き込みがあったりと不適切な使い方をする生徒が出た。生徒にとって ICT 端末は娯楽の道具であったことを考えると必ず起こるものであり、ICT 端末を活用するほど ICT 端末をめぐる問題も減少してきた。そこで ICT 端末の価値は使用者自身によって大きく左右されることをあらためて再認識した。

附中版「情報活用能力」

現在の学びと将来をつなぐことにおいて、ルールに縛られない ICT 端末の活用術は、生徒が身につけるべき資質・能力である。未来の学びに対応できるようになる生徒による生徒のための主体的な活動を位置付ける必要があった。そこで考えたのが「附中×GIGA」Supporters Team（通称：GIGA サポ）という組織をつくることである。

責任の自覚と心構え

まず協議したのは、附中版「情報活用能力」を考えることである。「ICT 端末の価値を決める責任ある考動」として ICT 端末を扱うことへの心構えを生徒のこぼれ整理した。

- ①情報モラルの正しい理解（ICT 端末を使用する者として自己責任を自覚する）
 - ②目的に合った正しい活用（目的達成のための道具だと意識する）
 - ③正しくコントロールされた自分（「ダメなことはダメ」と判断する）
 - ④現実とつないだイメージ（ICT 端末が実生活へ与える影響を考える）
- +ICT 端末を貸与してもらっていることを自覚する

V 実践内容③ 「生徒と共に創る授業」の推進

「GIGA サポ」への支援

ICT 活用を「共に」推進する取組が GIGA サポへの支援である。『附中×GIGA』の中心として本校の ICT 活用推進をけん引する存在となっている。

実践事例の1つ目が「情報の信頼性」をテーマに GIGA サポが授業をしたことである。総合的な学習の時間を中心に、情報収集にインターネットを使う機会が増えたことから、その必要性を感じておこなった活動である。「その情報は正しいの?」という質問を投げかけ、解決するために学習会を開き、専門家に相談をしながら、全校生徒に発信した。生徒の感想には、「いろいろな立場から見た情報を比べないと」「どこからの情報かを確認しないと」「正しい情報かを調べないと」といった情報の扱いを理解した意見が多く寄せられた。この活動を通して、「生徒が抱えている困りに気づけるのは私たちであり、もっとみんなの役に立ちたい」と GIGA サポの活動に前向きな気持ちを得ることができた。

2つ目は、GIGA サポが、行事・集会の準備から中継、そして片付けに関わったことだ。感染症対策で全校生徒が体育館等が集まるのが厳しいことを受け、行事を中継し、各教室に配信している。生徒会や教師と事前に打ち合わせ、リハーサルをし、配信計画を立て、機材の準備をする。また、聞き手を意識した配信は、オンライン特有の留意すべきことを

学習委員会(生徒会)と連携した学業指導の推進
「学びを紡ぐ5つの約束」

実感できる機会となった。

3つ目は、「端末の使用規定」を見直すことである。ICT 端末の導入時に教職員が作成した「端末使用規定」を守ることは、使用者である生徒自身が本当に ICT を「正しく」「より良く」使っていることにならない。「生徒のニーズに合ったもの」そして「安全なもの」として、生徒の言葉で発信するものにする改訂・編集の作業を行うことができた。

GIGA サポは、ICT 端末の操作における困りを解決する方法を Q&A にまとめるなど気づきから活動を見出し、『附中×GIGA』をけん引する組織として役割をはたしている。

授業に対する意識を「受ける」から「創る」にするために学習委員会と「共に」を実践している。本校にあった授業におけるきまりを、学習者(生徒)自身が見直し、心得えとして「学びを紡ぐ5つの約束」として学習委員会が整理した。

【学びを紡ぐ5つの約束】

- 1、学習者としての心構え、あたりまえをつくろう
 - 2、環境を整え、授業の雰囲気は自分たちの手でつくろう
 - 3、「問い」を大事にする学ぶ集団になろう
 - 4、ICT をよりよく使いこなす人になろう
 - 5、次につなげるためにふりかえろう
- ※問題や不具合が起こったときは、この標に照らし、自分で考え、志ある判断をしようというのが、附中生同士の約束である

「学びを紡ぐ5つの約束」では、附中生による「学び」の姿を示し、互いに学習する権利を守りながら、志を持ち続けて学び続けようという内容になっている。生徒には、約束のもとに考えながら考動するように促している。「自主・自律の精神の下、高い学力、深い愛の心、堪え忍ぶ力を兼ね備えた気品ある附中生の育成」という学校教育目標を生徒自身が意識する取組ともなっている。

上記の活動は、定着したと言うことはできない。しかし、生徒自身に「こんな集団になりたい」「こんな集団にしたい」「だからこんな活動をする」といった思いを引き出すきっかけとすることができた。本校では、制服検討委員会やカジュアルデーの取組など生徒主体となる活動は広がっている。目指す姿や思いのベクトルを合わせて、定着に向けた3年目にしたい。

VI 各調査の結果から見える実態

家庭における ICT 端末の利用状況
(R4.6 月実施)

『附中×GIGA』で一年間取り組んできて ICT 端末に対する道具としての意識を調査してみた。約69%の生徒は、自分専用の ICT 端末を所持している。家族と共用しながら ICT 端末を使える生徒を含めると家庭で ICT 端末を使用している生徒は約98%である。家庭での使用状況を調べると学習より学習外に使用する時間のほうが

使う時間		使う目的	
以上	未満	学習	学習外
3	～	4.6%	8.2%
2	～ 3	9.2%	13.3%
1	～ 2	18.3%	29.5%
0.5	～ 1	25.9%	22.7%
	～ 0.5	30.2%	19.5%
ほとんど使用しない		10.5%	6.2%

1日あたりの家庭での端末使用状況調査

長い。生活の中で ICT 端末が遊び道具として使われてきたから仕方のないことだ。しかし、およそ 95% の生徒は、ICT 端末を活用した学習（授業）が、学力向上につながると感じており、より良く使いこなす人になりたいと考えているようである。

生徒の中には、目的に応じて ICT 機器を使い分けているという生徒もあり、工夫

しながら学習道具として活用しようとする生徒も増えているようである。

次に3つの柱についてである。実践の振り返りアンケートの結果は次のようになった。

（学習者に対する質問の集計）

A、問い(1~4)	B、ICT(5~6)	C、共に(7~9)	D、手帳(10)	①	②	③④
1、私は、日ごろの授業において、『問い』を持つように心がけている。				44.7	47.4	7.9
2、私は、一時間で何ができるようにになれば良いかを意識しながら授業に取り組んでいる。				38.3	48.1	13.6
3、中学生の今、学習していることは、自分の将来に役に立つはずである。				58.4	34.7	7
4、振り返りをするとき、自分の改善すべきところやもっと学習したいところを書くようにしている。				41.9	42.6	15.6
5、私は、chromebook 端末を、効果的に学びができる「学習道具」として使っている。				78.2	19.4	2.4
6、私は、学校生活の場面で chromebook を活用できている。				73	23.7	3.4
7、私は、学校教育目標を言える。				35.9	36.8	27.2
8、私は、授業に臨むとき、『学びを紡ぐ5つの約束』を大事にできている。				29.9	53.8	16.3
9、私は、chromebook を使うとき、提案した『端末使用の約束』にある4つの心構えを考えている。				56.5	34.7	8.8
10、私は、手帳を有効に活用している。				36.6	36.4	27.1

（授業者に対する質問の集計）

A、問い(1~4)	B、ICT(5~6)	C、共に(7~9)	D、手帳(10)	①	②	③④
1、学習者が『問い』を持つように手立てやプロセスを意識しながら授業をしている。				33.3	66.7	0.0
2、校内研での取り組みは、自分の授業改善に役に立っている。				46.7	53.3	0.0
3、学習者が「学ぶ意義」を見出すような意識付けを行っている。				20.0	66.7	13.3
4、学習者に「見通し」と「振り返り」の往還による自己理解を促している。				26.7	60.0	13.3
5、生徒にとって chromebook 端末は、「学習道具」として定着している。				20.0	60.0	20.0
6、「～しやすさ」「良さ(効果)」に着目しながら、chromebook を活用した授業実践を行っている。				40.0	60.0	0.0
7、「めざす附中の授業」を生徒と共有できるように、同じことばを用いることなどを心がけている。				6.7	46.7	46.7
8、『学びを紡ぐ5つの約束』を生徒が意識できるように授業を行っている。				6.7	66.7	26.7
9、GIGA サポが提案した『端末使用の約束』を意識しながら指導している。				40.0	60.0	0.0
10、生徒は、手帳を有効に活用している。				13.3	86.7	0.0

授業者は、学習者に『問い』を持たせようと、ICT 端末を効果的に活用するなどの工夫をしながら実践している。実践交流を通して、学習道具として用いた学び方を共有するなど一定の成果を得ることができている。今後の課題としては、操作方法に戸惑ったり、準備した教材の不具合が生じたりしたときにサポートする体制を整えたい。

3つの柱

①あてはまる

②だいたいあてはまる

③あまりあてはまらない

④あてはまらない

授業実践と並行しながら、『共に』を意識した活動に取り組んできた。『学びを紡ぐ5つの約束』(GIGA サポ)や『chromebook 使用の約束』(学習委員会)といった生徒発信による約束を作成してきた。これまで学校に存在したいわゆる「きまり」を生徒のことに改訂する作業を通して意識が高まったと感じる。約束が浸透するように取組をしてきたが道半ばの状態である。掲げた理想を実現しているかを判断する達成指標を整えるなどして、生徒主体の活動を支援していきたいと考える。教師と生徒が取組で使用する「ことば」とその意味について共有しながら、研究を推進する学校を目指したい。

VII 今後の展望

6月の公開研では、3年ぶりに参集型で開催する。生徒(学習者)と教師(授業者)が『共に』学びにおかう姿を発信できるよう、本取組の総括をすすめる予定である。

【総括する内容(予定)】

- ①ICTを活用した『新しい学び』の検証
 - ・活用によって広がった『協働的な学び』の方法を整理する。
 - ・生徒の行動観察から『個別最適化された学び』のヒントを探る。
 - ・ICTを活用した授業と、学力向上の関係を「～しやすさ」に着目して考える。
- ②「学習道具」としての有効性
 - ・ICT活用に置き換えるものとアナログのままで行うことの「良さ」を整理する。
- ③附中の考える「情報活用能力」の整理
 - ・ICTの価値を決める使用者としての考動を整理する。
 - ・「なぜ使うのか」「どのように使うか」といった学ぶ意義の整理する
- ④今後の学校ICT化推進体制の整理
 - ・GIGAサポの活動内容を整理する。
 - ・ICT活用推進を支援する学校内組織をして整理する。

本校の実践事例が、少しでも役に立てば幸いである。

